近代中国とアジア主義

国際文化学科助教授　孫江

近代日中両国の関係において、「アジア主義」は重要な位置を占めている。アジア主義は明治期に一つの思想的潮流として形成した後、様々な意味を付与された。なお、日本の中国侵略との密接な関わりから、アジア主義は日本の中国侵略のイデオロギーであるという批判も受けてきた。戦後、魯迅の研究で知られる竹内好は「アジア主義」と題した論文を発表した。そのなかで竹内は、アジア主義という言葉に日本によるアジア「侵略」の一面と、日本とアジア諸国との「連帯」を現す一面があると述べている。これをきっかけに、日本の知識人の間にアジア主義に対する関心が高まり、アジア主義に関する学問議論も活発になった。今日においても、アジア主義をめぐる研究が次々と発表されている。

アジア主義をめぐる議論は戦後日本の思想界、言論界の新しい思潮を反映するものの一つであると同時に、日中両国の間にかつてあった「黄金の時期」への「郷愁」もしくは日本のアジア侵略への弁護を現すものでもある。また、グローバル化が進み、日本がさまざまな難問を抱える今日、アジア主義的な考えは問題解決の糸口につながるものとみる者もいる。一方、中国の学界においては、アジア主義は美しい言葉で飾られた侵略思想であると一貫して受け止められてきた。日中関係に関する研究のなかで、アジア主義についてはほとんどの場合孫文の「アジア主義」への言及に止まっている。

アジア主義に関する従来の研究と異なって、本研究は、中国における「近代性」（modernity）の形成という角度からアジア主義について検討するものである。19 世紀半ば以後の東アジアの歴史を振り返ってみると、中国の伝統的華夷思想に基づいた「世界システム」（朝貢システム）は資本主義市場を中心とする近代西洋の「世界システム」の挑戦を受けて次第に崩壊に向かった。このプロセスのなかで、明治以降アジア諸国に先駆けて近代化の道を歩んだ日本は、アジア主義を旗印に中国を始めとする東アジア地域の国々にもう一つの「世界システム」、すなわち「大東亜共栄圏」を強引に押しつけようとしていた。これら三つの「世界システム」の狭間に、中国の近代国家が形成しつつあった。そのため、中国が必然的にアジア主義と何らかの思想的、現実的関連性を持つようになる。実際に、20 世紀前半期の中国において、さまざまな政治的理念をもつ政治家・知識人あるいは宗教人が、それぞれ異なった立場から日本のアジア主義に呼応し、もしくは日本のアジア主義を批判していた。

本研究の主な関心は、日本人あるいは日本国家がアジア主義を中国に押しつけようとしたとき、近代国家の建設を至上命題とする中国人あるいは政治勢力がどのような態度およ

び行動を取っていたかという点にある。具体的に、本論文では、以下の四つの問題を取り上げる。すなわち、第一に、「アジア主義」という言葉の多義性を整理したうえで、アジア主義という言葉のなかにどのようなナショナリズム的およびトランス・ナショナリズム的な思想が含まれていたか、そして日本のアジア主義に対して中国人がどのように受け止めていたかについて分析する。第二に、孫文のアジア主義言説の内容およびその変遷について考察する。第三に、李大釗のアジア主義に対する批判を取り上げ、李の「新アジア主義」と中国共産党の中華民族理念の形成との関係について考察する。第四に、中国の新興宗教団体紅卍字会と日本のアジア主義との関係を分析する。そして、最後に、中国における近代国民国家の形成におけるアジア主義の位置づけについても言及する。

以上の考察を通じて明らかになったように、１９世紀末から２０世紀初期にかけて、中国の知識人たちは「同文同種」という文化的・心理的観点から、日本における近代化の成功が中国のモデルになるという錯覚から、日本のアジア主義思想に関心を寄せ、それに共鳴した。孫文の「アジア主義」に想像的な成分が多く含まれていることはその典型的な一例である。日中両国が地理的に近いことや深い歴史的・文化的関わりがあることから、両国の間に独特の「親しみ」の関係が生まれた。しかし、ここで強調すべきのは、このような独特の「親しみ」の関係はけっして日本のアジア主義者が主張していた完全同一の「同文同種」ではない、ということである。事実、日本のアジア主義者が中国大陸に足を踏み入れたときから、文明や人種を通じて日中両国の共通点を見つけようとする試みはすでに現実的な意味を失った。清朝の政治的腐敗、中国社会の無秩序状態、および中国文化の凋落を目にした日本人たちは、長い間抱いていた「文化の中国」に対する「想像的畏敬」を捨てた。なお、近代西洋の「世界システム」が世界を席巻するなか、日本が「脱亜」の道を選んで列強に仲間入りしたとき、中国はまだ近代化に向かって悪戦苦闘していた。西洋諸国を中心とする「文明対野蛮」の世界秩序のなかで、日中両国は全く異なった位置を占めている。したがって、日中両国が同盟関係を結成するような構想は、中国の主権喪失という不平等な関係を前提とせざるをえない。清末民国初期の約 20 年間、孫文は自らの「想像的アジア主義」を実現させるため、シシュフォス（Sisyphus）のように山の下から巨石を頂上へ運ぶことを繰り返していた。しかし、アジア主義という巨石は一度また一度と空想の山頂から転がり落ちてくる。最後に、孫文は「公理」をもってアジア主義を否定し、アジア主義に「王道」の理念を付与した。この思想的転換は孫文が自ら想像的アジア主義と決別し、アジア弱小民族の連合を主張することを象徴している。

章太炎の「アジア和親会」と李大釗の「新アジア主義」はともに弱小民族が連合して西洋列強に抵抗することを主張するものであるが、両者の間にはいくつかの相違点が存在す

る。すなわち、章太炎の思想が宗教や国粋といったアジア固有の文化的伝統に基づいたものであったのに対して、李大釗の「新アジア主義」思想は近代の「公理対強権」という次元において日本のアジア主義を批判したものである。李大釗の思想において特に注目されるのは、中国の「アジア主義者」が近代国家建設の目標を達成させるために、近代の「公理」をもって帝国主義およびその変形である二十世紀日本のアジア主義に対抗しなければならないことを認識した、ということである。

1920年代、日本のアジア主義が白色人種による圧迫への対抗という本来の趣旨から逸脱するに従って、アジア主義は一つの思想言説として中国の政治家や知識人を引きつける魅力を失ってしまった。日本による「満蒙」占領を積極的に進めたアジア主義の代表的人物である頭山満、内田良平および大本教の教祖出口王仁三郎らは、紅卍字会のような中国の宗教団体を通じて自らの政治的野心を実現させようとした。「満州国」支配の下で、紅卍字会は超国家的宗教団体から「教化団体」へと変質していった。このことは、アジア主義の超民族・超国家的殻の下にナショナリズムの幽霊が隠れていたことの証である。

戦後、日本の知識人は明治以来のアジア主義をめぐって自己反省と自己批判を行った。それに対して、中国では、アジア主義は学界においてほとんど注目されていない。戦後、蒋介石は抗日戦争勝利の際に行ったラジオ演説において、日本国家および日本人民に対して「旧悪を気にかけず」、「善をもって人に接せよ」などを述べた。国民党政権が台湾に移った後も、「中国と日本は兄弟の国である」というアジア主義的な言説が用いられていた。同様に、このようなアジア主義的な表現は、毛沢東時代から鄧小平時代を通して用いられていた。中華人民共和国政府と日本国政府が１９７２年９月２９日に発表した共同声明において、「日中両国は一衣帯水の隣邦であり、悠久な友好的歴史伝統がある」と記されている。しかし、１９９８年１２月江沢民国家主席が日本を訪問した際に、両国は「戦略的パートナー関係」を築いていこうという目標を提出した。このことは日中間にあるアジア主義的思いこみに終止符を打った。

日本のアジア主義に対する近代中国人の反応からみれば、中国における近代国民国家建設をめぐって、民族、領土、主権など近代国家の基本要素だけではなく、人種、文明、地域、道徳（公理、王道）などナショナリズムを超えたイデオロギー的要素も影を落としている。言い換えれば、近代中国において、ナショナリズムは近代国家形成の唯一のイデオロギー的要素ではなかった。このことは、われわれが「想像」(fiction) と「本源」(origin) の二つの次元から中国の「近代性」の形成という問題を再び考える際に新しい光を当てている。